

# 高文連道南支部演劇発表大会の 遺愛の発表、良かったです！！

10月4～6日に函館市民会館小ホールと遺愛女子高等学校会議室で、第67回高文連道南支部演劇発表大会が行なわれました。遺愛が当番校だったので、私も開会式から参加させていただきました。

参加校は4校で、市立函館高校『唯今（ただいま）』、函館大妻高校『海の果て』、函館中部高校『漬物語』、遺愛女子高校『思い出にさようならを』と題して演じていました。それぞれの学校の個性が出ていて、どれも素晴らしい演劇でした。

遺愛の作品は、死神により余命わずかだと宣告された女子高生が、学校祭への準備をクラスメイトと進めるうちに、死神の介入のおかげもあって、ぎくしゃくしていた友人との関係をのりこえ、生きる意味を見出していくという内容でした。ぎくしゃくしていた友人が、将来の進路をめぐって母親とやりとりする様子も、今の親子関係も伺えて、とても興味深いものでした。

2年前に、モモクロ主演の『幕が上がる』という高校演劇をテーマにした映画が上映されました。観た方も多いと思います。

劇作家・平田オリザが書いた初めての小説を映画化したもので、富士山に見える静岡の高校に通う主人公が、仲間と高文連の大会に挑みます。目指すは地区大会突破。そんな時、学校に新しい先生がやって来た。「何だ、小っちゃいな、目標。行こうよ、全国」。すべてはその一言から始まります。地方の高校演劇部を舞台に、一途な思いがぶつかり、交差し、きらめく映画です。

でも、この映画は、大会の結果を描いていません。それは、青春の本質を描くに当たって重要なのは、小さな現実の積み重ねで日常を描くことにあり、大会の結果よりも、演劇部の部員達が最高に輝く瞬間、幕が上がる瞬間で映像を終わらせる方を選んだのだと評した方がいました。

遺愛の劇は、手づくりのオリジナルシナリオですが、小さな現実の積み重ねで日常を描き、青春の本質を表現した作品と言えるでしょう。

2017年10月10日

